年末回顧'91 県内

〇〇上

美術

星 雅彦

静謐な内景の幸地学展
印象深い永津禎三展

'91初頭は、安谷屋正義の回顧展から始まった。抑制のきいた孤独な哀感、「望郷」や「道」等の作品やエスキスがあり、多くの鑑賞者たちは懐かしく巡り逢えたわけである。このことと、筆者が一年を顧みた感慨とは、極めて対照的なものになっている。というのは、幾人かの昨今の画家たちが、混沌の中に身をおいて、画面で激しく暴れてみせる現象があって、この対峙が新たな問題提起を感じさせている、と言いたいのである。

もう一つの回顧展は、読谷村立美術館一周年記念としての現存作家の城間喜宏展であった。城間喜宏は自作解説を新聞に連載し、忘れかけていた村立美術館の存在を、なんとか観客動員させて世に問うたことになる。

県外からの綿密な上陸作戦による展覧会も数多くあり、中には目覚ましい有意義なものも幾つかあった。それらを順を追って列記しておこう。高田博厚彫刻展、幸地学展、富田文雄版画展、「ヨーロッパ近代絵画の流れ」展（浦添市美術館）、エッシャー展（パレットくもじ）、安元亮祐展、永原達郎展、田原幸浩展、山下治展、アジア現代美術展（那覇市民ギャラリー）、カジ・ギャスティン展等々である。

就中、若い幸地学の二年ぶりの個展が異彩を放っていた。また十月の報道では、五月にニューヨークで個展を開き、パリでも個展開催中とあり、相次ぐ作品発表で国際舞台に登場しつつあるとか。そのアクリル・パステル・リトグラフの作品群は、記号的奇異な形態と多面的立体性を伴う構図配色から構成されていて、謂ってみれば矛盾と秩序が交錯するものの、静謐な内景の展開を感じさせた。

幸地 学氏

永津 禎三氏

一方、県内の個展から拾って行くと、長嶺斉展、阿部ゆき個展、金城満個展、伊江隆人展、金城明一風景画展、山城見信展、高橋渉二版画展、中島イソ子展、永津禎三展、ゴヤ・フリオ彫刻展、小橋川肇作品展、下地寛清作品展、朝内信二郎展、新城征孝絵画展等々があり、それらは'91年前期に開催されている。その中では、金城満・伊江隆人・金城明一・山城見信の四人は、下半期でも個展を開いている。この年二回以上の個展開催には、ギャラリー側の要求に応じた約束にもよるが、作家側の情熱的な制作意欲に依るところが大きいと見てよい。ただ評価については、その内容を些細に比較して見る必要があるであろう。

ところで、上半期の個展の中で最も印象深かったのは、五年ぶりに個展を浦添市美術館でひらいた永津禎三展である。縦長の展示空間を活用して大パネルを屏風状に立てた作品や、高さ二㍍七十㌢もある楕円型鏡状の四作品等、それらは抽象表現による森林イメージの延長上にあり、書道の筆勢の動的変化を採り入れていて、爽快なイメージによるリズム感と色彩の諧調を打ち出していた。それらは作者が時間をかけて悠長に着実にねりあげた成果であった。

さらに、'91年後期の中から二、三選抜する前に、繁雑ながら、ひとまず数多い個展名を列挙しておこう。与那覇朝大絵画展、平良晃絵画展、百名えり子絵画展、仲松清隆個展、渡名喜元俊個展、大城久美子展、喜名景昭展、辺土名朝文展、城間喜宏展、伊江隆人展、山城見信展、能山宗忠彫刻展、真喜志勉展、名渡山愛擴展、浦崎彦志個展、大浜英治絵画展、山之端一博絵画展、金城明一展、久場とよ展、治谷文夫個展、照屋万理個展、屋冨祖盛美展、宮城明展、金城規克写真展、与儀達治個展、喜久村徳男個展、玉城栄一油絵展、金城満展（丸山映・上條文穂・江木健）による三人の彫刻展、等々。

その他に諸々のグループ展などもあって、展示会がいよいよ盛んになってきた観がある。そのことは、活発な市場の需要と供給の関係を意味し、それ故に新聞紙面も華やかになってきたのだ。それには画家たちが大いに書き手となっている展評提供と、美術担当記者たちの取材発奮による多大な紹介記事とにあずかるところ大である。―説明を省くが、この現象を擬似批評活動というべきであろう。

（詩人）

年末回顧'91 県内

〇〇9

美術

〈下〉

星 雅彦

作品の大型化が特徴
ユニークな彫刻展 率直に哲理を求める

今年の作品傾向の一つとみてよい特徴として、作品サイズの拡大化が挙げられよう。それらは展示場に合わせて壁面一杯に描いてみせる意図をもち、観客はずぼし驚嘆するのである。それ故に、大きければ大きいほどよいという皮相な論理の危ぐが、ふと脳裏をかすめるのも否めないことである。

今に始まったことではないが、右の代表的傾向の顕示が、秋の伊江隆人展の作品だと言えよう。三月の彼の個展では、板・角材の型破りなフレームに墨汁等を投げつけコラージュを加えた作品となり、粗雑なスタイルの中に優美さが垣間見えていた。九月にはさらに大暴れして、全面拡大し、そのエモーショナルなアクションペインティングの「南の島」は、抑え難い思いの噴出だが、逆に迫る美意識が弱められていた。

この傾向は、激しい筆勢で描いた大浜英治の作品にも多少感じさせるものがあった。また沖縄新象展の出品中の知名久夫の巨大作品もその傾向をもつが、ここには現代絵画の一特性である装飾性の比喩的表現が濃厚であり、同時代の劇画的軽快さが反応し、それだけ救われていたと言えよう。

もう一つ見逃せないジン・スミトモなる人物のJ.I.N. TAN展で、軽佻（けいちょう）を装って見せたもの、工事現場の長い壁の落書きを装った作品群のもつもの、あのとぼけたユーモアで装飾絵画の特性を示していた。

山城見信氏

丸山映氏

広い意味では、一貫したリリシズムの求心的ロマンを描く与儀達治の、水面下の少年少女の夢想世界の作品群にも、装飾性が柔和に生かされている。今回は色調が注目された。ところが現代絵画の装飾性の中には、コンテンポラリーの落とし穴があって、知らず識（し）らずそれが高じると装飾過多、華やいだ無思想性の作品になってしまう傾向がある。この傾向は現代的華美な意匠となり、しばしば散見できる。自らの意匠に気付かない作品もあり、手探りの器用なはけ口を求めた作品もある。その後者に相当するものが喜久村徳男の鏡・ガラスによる工芸的オブジェ作品である。他方、タブローからはみ出た金城満の一連の作品は、前者に近い一面が見受けられ、技術の見せ方はともかく、それなりに存在しながらも装飾それ自体で終わっている。いい気になって、この種にヘタな理屈をつけると、出口なしの言葉の遊技になりかねない。

装飾性を雑多な技法の中に抑えつけ、巨大作品をエネルギーの発露にとどめず、総体的にガードした蓋然性ある作画をものにしたのは、読谷の倉庫（村立美術館）に長期展示した山城見信展であった。「極東トンボ」を代表する一連の作品は、おびただしい密着観念からどうやら解放され、人間の悲喜劇をあるがままに捉（とら）えてみようという遠い求道のあらわれか。それら傷痕の深さを見せる重厚な風景は、何か落日のような輝きを帯びていた。今年の収穫である。

最後に、彫刻に触れておきたい。ユニークな彫刻家たちが静かに出番を待っていて、リアルなイラブーの強い存在感で生命をおう歌した能山宗忠彫刻展、銅板やステンレス線で人物をかたどって陰と陽のイメージ喚起を試みたゴヤ・フリオの彫刻展、いずれも自然のありさまや哲理を率直に求めていた。

一方、アイロニカルに茶かした姿勢から屈折した視点と発想でもって、ベニヤ板の断面接着によるユニークな立体形態のてわざを見せた丸山映の彫刻は、記憶に新しい。その人体を抜き取ったようなユーモアをたたえた作品群や、「空間の鳥」などで有名なコンスタンチン・ブランクーシの「無限柱」をパロディー化したらしい「時間」と「空間」のトリッキーな変化を示した作品など、逆説的な深いイメージを投げかけてくれた。また同展示の、ケント紙を圧縮して琉球石灰岩の風景を捉えようとした上條文穂や、鉄板で有機物の形態に挑んだ江木健らの作品群から、今後の制作計画にも期待がもてた。

なお、'91年は沖縄にも縁があった日本画壇の重鎮・中川一政、県出身で長く東京在住の芸術院会員だった浦崎永錫、共に大いなる功績を残して高齢で他界したこと、一方では八重山に在って沖縄新象作家協会の中堅的実績のあった新城剛が四十四歳の若さで急逝したこと、あわせて末尾ながらもう一度ごめい福を祈りたい。

（詩人）